Q.0　暖房を入れてほしい.
A.0　この建物は，12月にならないとスチームが入らないと思いますので，寒ければ厚着をしてきて下さい.

Q.1　教室が寒いうえに，文学部棟から離れているので，変えてほしいです.
A.1　寒い点については，A.0を参照．この時間帯は，ここ（教育K217）を含めて，文学のすべての講義室が埋まっていて，移動できる部屋はありません．因に，私は，前期・後期とも，このK217での授業が2コマあります.

Q.2　せっかく実存主義かじったならぜひお聞きしたいです.
A.2　ハイデッガーとヤスパースがドイツ語，サルトルがフランス語，キルケゴールがデンマーク語を引用することになって少々面倒かと思いますが，時間があればそうします.

Q.3　哲学⊂思想になるのですか.
A.3　個人と社会（個人の集合）という対比で見ると，そういうことになりますが，実は，哲学の定義，思想の定義によってそう簡単にはいかなくなります.

Q.4　この大学の哲学でどんな内容ができるのかを広く紹介してくださる時間がほしいです.
A.4　大学では，「学生は自ら問題を見つけて自分で学ぶ（最終的に卒論を書く）」ことが原則です．授業や教員の指導は，そのための準備や助言という意味があります．学部生は，教員の専門分野に関係なく，自分がやりたいことをやればよろしい．大学院になれば，自分の専門分野と同じか近いことをやっている教員がいる大学院へ移ればよいでしょう．いずれ時間をとって，哲学教室に在籍している先輩たちに来てもらって，話をしてもらうつもりです.

Q.0　何故，両腕に腕時計をしているのか？
A.0　以前は，右だけ（自動巻なので動かしていないと止まる）だったが，光が動力源の電波時計を買ったので，これも光を当てていないと止まってしまうから．

Q.1　プリントの4ページの177行目のプラトンの横の数字は何を表わしていますか？
A.1　引用する際の（国際的）基準になっているステファヌス版のページ数とコラムの位置を示すアルファベットです．

Q.2　プリント2ページの上の図みたいなのがよく分かりませんでした．
A.2　位置関係がずれているので，わかりにくいですが，あらためて授業中に説明します．

Q.3　先輩方や先生はある哲学者について学ぶために，その哲学者の使う言語を学んだという話がありましたが，何故その必要があるのかを知りたい．
A.3　別紙のデカルトの例を参照してください．

Q.4　ギリシア語は難しいですか？
A.4　書く人（プラトンやアリストテレス，プルタスコスやクセノポンなど）によって違います．しかし，仮に，自分にとって難しいと思っても，ギリシア語を読み書き話していた人たちがいたのですから，我々にもわかるはずだ，と思って学ばない手はありません．

Q.5　形而上，形而下とは哲学の中でどのように分かれているのですか？
A.5　「形而上」（『易経』）は，meraphysical の井上哲次郎による訳語．「時間・空間の感性的形式を採る経験的現象として存在することなく，それ自身超自然的であって，ただ理性的思惟に，また独特な直観によってとらえられるとされる究極的なもの」．「形而下」は，physicalの井上哲次郎による訳語．「自然一般・感性的対象，即ち時間・空間のうちに形をとって現れるもの」（以上，新村出編『広辞苑』第二版による）
→プリントで取り上げる，アリストテレスの四原因を参照．

Q.6　この講議はどのような形で成績をつけますか．
A.6　レポートを提出してもらい，レポートだけではあやうい人には，出席点（質問の内容も）を加味します．

Q.7　哲学と倫理学の違いとは何ですか？
A.7　これも，それぞれの定義によりますが，伝統的な解釈（例えば，アリストテレス）によれば，哲学が倫理学を含み，哲学の中でも，倫理学は，特に善悪などの価値判断に関わります．これについては，授業のプリントでも取り上げます（→プリントで取り上げる，アリストテレスの学の区分を参照．）．

Q.8　日本語で西洋人の本を読んでも著者の言いたいことを完全に理解できるでしょうか．
A.8　「完全に」の意味によるでしょうが，Q.3を参照して下さい．

西洋哲学入門　　2011年度第３回(2011/10/19)へのコメント

Q.0　人が花を見とき，その見え方は人それぞれで，本当は白い花なのに黄色だと言う人もいるという話がありましたが．．．一人一人見え方が違っている時点で「本当の」色というものは決めることができないのではないかと思います．
A.0　その通りです．或る人の考えや知覚（見えている内容など）を，そのまま，他の人には伝えられない，つまり，他人はどう見えているか，どう思っているかは，（そのまま完全には）わからない，という立場を，認識に関する独我論(solipsism)と言います．この議論は，自分も，他人も超えた特権的なところから論じています（本当の色がわかるものがいるという立場）．そうでなければ，この説明は成立しません．

Q.1　objectとsubjectの意味はなぜ逆転したのしょうか．
A.1　正確なことは分かりません．原典と翻訳の資料で見たように，17世紀のデカルトでは，obiectum（表象，精神の中の観念）とsubiectum（外界の基体）ですが，18世紀のカントでは，現在と同じように，objektiv（客観的）とsubjektiv（主観的）という使われ方をしています．17世紀から18世紀にかけて逆転したのだろうと推測されます．もっとも，14世紀のオッカム（哲学，論理学，神学で重要な人物）は，基本的にデカルトと同じ使い方をしていますが，部分的に，魂（こころ，精神）をsubiectum（基体）とする用法があって，これをもし，「主観」と訳せば，現在の用法と一致します．

Q.3　古代の哲学者は他の分野も研究していたようですが，哲学を勉強するにしても，他の分野にも幅広く興味を持った方が深く学べますか？
A.3　狭い意味での哲学と名のつく分野だけでなく，広く関心をもって学んで下さい．

西洋哲学入門（中間発表会）　　2011年度第４回(2011/10/26)へのコメント

Q.0　何だか今の段階では，完成していないから当然なのだろうけれども，論文の主題を決めることや文献の立場の不明確なものについて言及する場になっているように感じた．しかし，この時点であやふやで大丈夫なんですか．
A.0　大丈夫でない場合もありますが，頑張ってもらうしかありません．卒業論文も修士論文も博士論文もすべて，書いて提出したらおしまいではなくて，審査する先生たちが読み終えた後，口述試験といって，一人づつ審査する先生たちの前に呼ばれて，30分から１時間（場合によってももっと長く）論文の内容について質問されて，それに答えなければなりません．これはヨーロッパの大学に由来する制度です．ですから，今回の中間発表会も，発表の部分よりも，その後の質議応答のほうが重要なので，中間口述試験と呼んだほうがよいかもしれません．

Q.1　結局論文というものは，過去の哲学者の考えを解釈するだけのものにしか思えません．過去の哲学者の名前が一人も出てこない論文というものは，可能なのでしょうか．
A.1　可能です．自信があるならやってください．ただし，自分が初めて考えたつもりの内容でも，調べてみると，過去に同じようなことを考えていた哲学者がいる可能性は非常に大きいので，それを知らないで書いても学問としての哲学としては評価されません．

Q.2　発表者が，質問を聞き終わった後「ありがとうございます」と一言言ってから質問に答えていたのが印象的でした．
A.2　学会発表などをするときの礼儀です．

Q.0　本当に1から論文（問題？）を考える人がそんなに少ないのなら，後世まで名が残るような哲学者は輩出されにくくなってしまうのではないですか？
A.0　一から問題を考えることと，他の哲学者の名前を出して，その哲学者の学説を解釈したり検討・批判することとは別のことではありません．カントは，主著『純粋理性批判』で，デカルトやヒュームその他の哲学者に言及して議論を展開していますし，デカルトは，当時の習慣から，ほとんど他の哲学者の名前を出していませんが，中世以来のスコラ哲学の考え方（例えば，トマス・アクィナス）を引き継いで議論しています．その上で，何か新しい考え方を少しでも提示できたら，それは大きな前進と言えます．

Q.1　なぜタレス（ママ）は原理が「水」であると考えたのかわからない．
A.1　同様に，何故，アナクシマンドロスは始元（アルケー）を「無限（アペイロン）」と考え，アナクシメネスは「空気（アエール））」と考えたのかは分かりません．ただ，タレースの場合，アリストテレスの言うような物質的な質料の面にだけ注目したのではなくて，自然界の生命現象のあるところには，「水，水気」があることに気付いて，生命原理としての「水」を主張したのではないかという解釈があります．授業でも言及しますが，アリストテレスは，自分の四原因の考え方に従って，ソクラテス以前の哲学者達の考え方を，ある部分は批判し，ある部分は評価しているので，これを，我々はアリストテレスの見方として受け止めるべきであって，そのままギリシア哲学史の客観的（ありのままの）姿として受け止めるべきではない，ということです．

Q.2　哲学を学ぼうとしている人はカントの本から読み始めたらだめなのでしょうか．
A.2　だめなことはありませんが，カントの何を読むかによると思います．また，原語で読むのと，翻訳で読むのとでは違います．

Q.3　哲学の歴史って，哲学が進歩してきた歴史なのか，それともただ違う色んな考え方が並んでいるだけのものなのかわからなくなってしまいました．哲学って進歩しているんですか？
A.3　自分に至って哲学が完成するという立場にヘーゲルが立っているとすれば，そのヘーゲルから見れば，哲学の歴史は「阿呆の画廊」である，と言われていることは有名です．しかし，そのヘーゲルにしても，過去の哲学者の考えがすべて無意味なわけではなく，過去から現在に至るまでの，人間の精神の思索を辿ることが，同時に哲学することになる，という解釈もあって，その場合は，哲学史（的探究Untesuchungen）が，同時に，哲学になります．そのような観点から，ヘーゲルの『哲学史講議』を積極的に評価することができます．しかし，哲学が，他の個別学（領域学）と異なるならば，他の学が進歩するというのと同じ意味で進歩する，ということはないでしょう．実際，どのような観点から見るかによって違いますが，哲学の場合，新しい時代の哲学のほうが優れているとは限りません．

Q.5　デカルトは「哲学を学ぶのではなく，哲学することを学ぶ」と言っている．．．
A.5　デカルトは「書物による学問をやめて，私自身のうちに，あるいは，世間という大きな書物のうちに見い出されるであろう学問だけを求めようと決心した」ということを言っていますが，「哲学を学ぶのではなく，哲学することを学ぶ」というのは，カントではないでしょうか．（別紙資料参照）

Q.0　タレースのように万物の根源を探求（ママ，究）する際に，万物（生物？）を創造したのは神と考えなくては責められなかったですか？「水」と考えるのは宗教が嫌う科学的思考に思えますが．．．
A.0　実は，アリストテレスがどのようにタレースを見たのかとは別に，タレース自身は，「水」を単に物質として捉えていたのではない，という解釈があり，それによれば，タレースの立場は，（自然）科学的とは言えなくなります．また，古代ギリシア人には，キリスト教やユダヤ教のような神による世界創造説はありませんので，宗教的な問題はありません．

Q.1　数は質量（ママ，質料）であるのか形相であるのかという部分で，形相であるということはわかりました．でも，質量（ママ，質料）であるという考え方があまり分かりませんでした．この世のことがらはすでに数によって決められているということですか．
A.1　ピタゴラス派の考え方は，アリストテレスの見るところでは，この世界はすべてが，数を素材として（必ずしも物質でなくてもよく，構成要素，素材，材料として）できているとされるので，ピタゴラス派の数は，質料だというわけです．

Q.2　アリストテレスが言う目的因は，自然科学では否定されるものだと思いますが．
A.2　例えば，ジャック・モノーの『偶然と必然』（資料）からの引用を読んでみて下さい．現代の自然科学は，目的を認めない機械論的立場の行き詰まりに対する反省から，機械論的立場と目的を認める合目的的立場の間を揺れ動いているという印象を受けます．

Q.3　ピュタゴラスは，＜アリストテレスの四原因説＞と同じ考え方を持っていたことがわかった．
A.3　ピュタゴラス派の「数」を，アリストテレスの立場からみると，質料因となる，ということで，ピュタゴラス派が，アリストテレスと同じ四原因説をとっていたということではありません．

Q.4　アリストテレスが政治などは現実にあてはめる次善策として考えていたのか，単純にそれぞれに最良の方法があると考えていたか，全く別の考えだったのかは気になった．
A.4　アリストテレスは，現実に行なわれている政治体制については，それぞれの国ごとに異なるけれども，現実に行なわれているているかどうかは別にして，政治体制そのものについて，異なる政治体制の優劣を考察しているので，この限りでは，現実の政治体制は次善のものと考えていたと言ってよいでしょう．これに対して，善のイデアによって，政治学や倫理学を絶対的な正義を実現するものと捉えていたプラトンは，中期の『国家』篇では，確かにそうですが，後期の『法律』篇になると，現実には実現しがたい理想は理想として，現実に即した，次善の国歌体制について考察しています．

Q.0　形而上学がどのような学問なのかよくわかりません.
A.0　まず，自分で調べて（大きな辞典を引くとか），形而上学と名のつく本を読むとかして，勉強してから質問して下さい.

Q.1　なぜアリストテレス以外の哲学者たちはタレスについて語っていないのかが不思議だった.
A.1　確かに不思議です．もちろん，アリストテレス以降の哲学者はタレスに言及することがありますが.

Q.2　レヴィナスが倫理学を第一哲学にしたのは単に倫理的な判断からにしか思えません.
A.2　その倫理的判断の内容を教えて下さい．それと，「第一哲学」という名称は，例えば，デカルトの『省察』も正式には，『神の存在および人間的霊魂の身体からの区別を論証する第一哲学についての省察』となっているように，哲学史上，アリストテレス以来の哲学の中心問題を考察する分野として重みをもつものと哲学者達によって意識されていたことが前提にあります．因に，『省察』の内容は，Q.0の形而上学の対象でもあります（形而上学を認める哲学者と認めない哲学者がいますが，認める哲学者でも，内容が微妙に異なります）.

Q.3　記述（文字で書くこと？）をギリシア人が好まない（？）のは，反論ができない意外にどういう理由からですか？
A.3　書くことを好まない，というより，哲学の営みは，言葉で問答することが通常で，書くことは，日常的でなかった，ということが考えられます．書くための道具が高価であった時代には，よほど重要なことしか書かなかったという事情があると思います．書くための手段が容易に手に入るようになってからは，書くことが中心になりますが，それでも，欧州では，筆記試験よりも口述試験が重視されて現在に至っている，という印象を受けます.

Q.4　ヘーゲルなどは，具体的に語られることばによるコミュニケーションというより，概念的な思考を重要視していますが，プラトンやアリストテレスはどのような言語観をもっていたのでしょうか.
A.4　難しい問題ですね．ヘーゲルは，Begriff（概念）ということを言いますが，論理性（論理的整合性）とはちょっと違う気がします．プラトンやアリストテレスは，問答法（ディアレクティケー）を大切にしますが，自分一人の思考（思惟）の中にも，自己との対話という問答法を想定していて，そこで重視されるのは，論理性です.

Q.5　当為の先行性を主張する人たちの中には，プラトンの「善のイデア」のような常に正しい「～すべき」ことがないとする人はいなにのでしょうか.
A.5　当為が原理的に先であるということは，「～すべき」ことが原理的に先立つということなので，論理的に矛盾します．ですから，ちょっと思い当たりません.

Q.0　プラトンの書簡の中には成りすましが多く含まれているというなら，どれがプラトンの書き残した遺稿だと判断する基準は何ですか．
A.0　文体と書かれている内容を基準に判断されています．学者によって判断が異なりますが，詳しく知りたければ，R.S.ブラック（内山勝利訳）『プラトン入門』（岩波文庫）の内山先生の解説（p.323～339）を読んでみて下さい．

Q.1　「生きた魂を持つlogosのかげ」という表現で，プラトンで「かげ」って聞くと，イデア論の「洞くつの壁にうつった自分のかげを．．．」っていう表現を中学で聞いたのを思い出しますが，同じ意味での「かげ」ですか？
A.1　「洞窟の比喩」は，『国家』VII巻(515A sqq.)で語られますが，そこでは，「洞窟内の模像とその影」が「上方（洞窟の外）の実物とその影」に対比されてます．この場合の「影」は，skiaといって，影絵のように，文字通り，物体に光があたってできる黒い影のことです．他方，「書かれた言葉（文字）は，魂の内なる言葉の影」と『パイドロス』(276A)で言われるときの「影」は，eidolonといって「幻影」といった意味です．ですから，どちらも「かげ」と訳してしまうと，厳密には，違うことになりますが，何か本物（本体）があって，それが何らかの仕方で，写し出されたもの，という点では共通していると言えるでしょう．
　プラトンは，さらに，『テアイテトス』(208C)では，「音声のうちに投写された思考(dianoia)の影(eidolon)」ということを言っています．そうすると，言葉(logos)が用いられる，少なくとも３つの段階（場面，相）があることになります．

1)「生きた魂を持つlogos」「魂の内なる言葉」＝「思考(dianoia)」
2)「音声のうちに投写された思考(dianoia)の影(eidolon)」＝音声，話し言葉(phone)
3)「書かれた言葉（文字）は，魂の内なる言葉の影」＝文字

　言葉は，本来，他人との意志の疏通のためにあると考えると，2)と3)が本来の用いられ方ということになりますが，3)は，読み手が間違って読んでも，訂正ができず，2)は，問答を通じて，相手の理解を確かめて，間違いがあれば，訂正できる点で優れているものの，言葉によって伝えられることしか伝えられず，もし，言葉にならないものがあれば，それは伝わらないか，伝わりにくい，という欠点があります．1)は，伝える必要がないといえばそれまで，ですが，プラトンも（そしてアリストテレスも），人がひとりで思考する，ということを「自己との対話」と捉えていて，そこでは，音声も文字も必要なく，思考（内容）そのものが自己から自己へ伝わると考えられており，これは間違いなく最も確実に伝わると考えられます．

Q.2　"断片"としてプラトンの主張を昔の文献から探し出し，その断片州集として集めたディールスとクランツの功績はすばらしいものだと思った．
A.2　プラトンの著作（対話篇）とアリストテレスの著作（講義録．対話篇などの著作は失われて断片的にしかわからない）は，奇跡的に伝わっていますが，ソクラテス以前の哲学者の著作は，失われて断片的ににしか分かりません．それを集めたのは，ディールスとクランツの『ソクラテス以前の哲学者の断片集』です．プリントp.2の教科書的記述の自然哲学系列（タレース～デモクリトス）とソフィストたちがその内容です．ソクラテス以前の哲学者を，VorsokratikerとかPresocratics, Presocratiquesと言うことがあります．

Q.0　アリストテレスが批判しているディアレクティコイは危（ママ，正しくは詭）弁派ということになるのですか？それと，アリストテレスはディアレクティケーを哲学の方法として認めているということでよいのでしょうか？
Q.1　傾向としては，アリストテレスは，論証と問答法のどちらに重きをおいているかはわからないのですか？
A.0, 1　アリストテレスは『トピカ』という著作で，彼のディアレクティケー（問答法）について扱っていますが，『トピカ』と内容的に関連がある『詭弁論駁論（ソフィストの論法）』という著作で，ソフィスト的な論法に対する対応策を考察しています．また，『形而上学』の中でも，ディアレクティコイに対する批判が展開されます．そこで，批判の対象となっているディアレクティコイに共通しているのは，アリストテレスからみて，彼らは，問題となっている事柄が実際どうなっているか（真理）を明らかにすることが目的ではなく，事柄の実際がどうであれ，自分たちが相手に論じ勝つことが目的になっているということです．アリストテレスは，アポデイクシス（論証）とディアレクティケー（問答法）に関して，どちらかが自分の哲学の方法であるとか，どちらか一方が優れている，とかいうことをはっきり言っていません．これまでにいくつかの解釈がなされていますが，赤井のみるところでは，学としての哲学は，アポデイクシス（論証）もディアレクティケー（問答法）も使わざるを得ないと思います．しかし，これらは使う場面が異なります．前提となる事柄が明らかである場合は，アポデイクシス（論証）を用いることができますが，前提となる事柄が明らかでない場合は，観察されたパイノメナ（現象）や人々のエンドクサ（通念，ただし，通念にも程度の差があります）基づいて，ディアレクティケー（問答法）で議論を進めなくてはならないでしょう．現に，アリストテレスの論述自体がそのようになっていると思われます．

Q.2　アリストテレスが批判しているディアレクティコイにソクラテスは入るのですか？
A.2　入らないと思います．アリストテレスは，『詭弁論駁論（ソフィストの論法）』の中で，ディアレクティケー（問答法）の創始者を詮索していますが，ソクラテスの名をあげて，自分（アリストテレス）のディアレクティケー（問答法）は，ソクラテスの問答を受け継ぐものとして，ソクラテスを評価しています．

Q.3　論証と問答法の違いは，結局，議論の前提を問えるのか，問えないのかの違いなのでしょうか？
A.3　その通りです．

Q.4　論証は厳密学のための方法で，問答法は通念のための法方（ママ，方法？）であるということなのでしょうか？プラトンの問答法とアリストテレスの問答法はどのように違うのでしょうか？
Q.5　問答法といわれるとソクラテスを思い出しますが，彼のいう問答法はプラトンのものとアリストテレスのものとどちらに近いのですか？それとも別のものなのですか？
A.4, 5　歴史上のソクラテスの問答は分かりせんが，プラトンもアリストテレスもそこから発しています．簡単に言うのは難しいのですが，プラトンとアリストテレスの問答法の違いは，イデア論を備えているか否かの違いであると言えると思います．

Q.6　プラトンは思考のことを「魂の内なる言葉」と呼び，音声や文字とは区別していまたが，実感としては自分は思考は頭の中の響く自分の声であり，これもやはり音声のように感じます．言語を使わずに論理的な思考をすることは可能なのでしょうか？
A.6　「思考は頭の中の響く自分の声であり，これもやはり音声」と感じるのは個人の自由ですが，哲学史的にみると，質問者のいう「思考は頭の中の響く自分の声」は，「概念」のレベルであり，「文字」や「音声」とは区別されてきました．言語を「概念」「音声」「文字」に区別した上で，言語を使わずに論理的な思考をすることは可能ではないと思います．

Q.7　論証が問答よりも優れているという考え方は何だか今の学問のあり方の帰がする．
A.7　論証と問答（問答法）のそれぞれの意味と，それぞれが用いられるべき状況や場面があることを考えてみて下さい．

課題へのコメント　　2011.12.21.

(Q.0)　「小論」
A.0　みなさんは，「小論」の意味が分かっていますか？

(Q.0') 「質量」
A.0' 質料

(Q.0'')　論争
A.0'' 争論

(Q.0''')　持つ
A.0'''　もつ

Q.0''''　よって
A.0''''　従って，

Q.1　p.61で，アリストテレスが「ディアレクティケーはそれぞれの知識の出発点の中でも第一のものに関して役立つ．なぜなら，一方では，当該の知識・・・というのも，ディアレクティケーは吟味批判の仕事をすることによってあらゆる探究の出発点へ至る道をもっているからである」(Arist. *Topica,* A 2, 101a36-b4) 言っている意味と，「認識の対象によっては，「論証」という方法では扱いえないものがあり，これを扱うのが，他ならぬディアレクティケーである」という部分の意味もわからなかった．
A.1　これを理解するには，アリストテレスの『トピカ』を読んで，それが問題としているところ（論証とは何か，問答法とは何か）を理解することが必要です．

Q.2　p.59の「アリストテレスは別の箇所で次のように語っているが，これは「真理」の探究としての哲学を自分に先行する人びととの共同探究(συζήτησις)として捉える視点」とは何か．
A.2　一人で探究するのではなく，過去（そして現在）の人々と問答することによって共同して問題を探究するということ．

Q.3　p.57で，アリストテレスは神学を観想的な学の一つとしているのに対して，神話をたとえ現実的なものとして捉えていなかったとしても，神学について仮名が得る際に整合性があわなくなる（なくなる）のではないか．
考える
A.3　アリストテレスの神学は，世界の原因としての「不動の動者」を扱う学なので，神話を語る人たちと同列に扱えない．

Q.0　哲学関係の人は何ケ国語くらい読めるんですか？
A.0　英・独・仏・ギリシア・ラテンの５つが必要でしょうが，大学の哲学の先生になっている人でも，昔勉強したことがある，という程度で，みんなが五ケ国語読めるわけではなさそうです．研究内容によって，さらに，近代語では，イタリア語，スペイン語，デンマーク語，オランダ語など，また，古典語としては，ヘブライ語，アラビア語も必要な場合があります．学部生なら，まず，これらのうち，２つは，ある程度，読めるようになってほしいものです．

Q.1　（ヘーゲルに関して）著作で体系を完成させなかったと書いてあったけど，メモから話ができて学生のとったノートから次の講義ができるというのは，頭の中に完成した体系をもっているからだと思うから，体系を完成させたと言えば完成させたんじゃないかと思った．
A.1　加藤氏が言っているのは，ギムナジウムでの講義のことではなくて，ヘーゲル死後の大学での講義録を寄せ集めた，弟子達による編集作業によって出来上がった全集のことで，この全集の完成状態をヘーゲル自身が見たわけではないので，ヘーゲルが体系を完成させたのではなくて，弟子達が，いわば，勝手に，体系を完成させた，という意味です．そして，一見，体系をなしているように見える全集を構成する材料となった，講義録は，重複があったり，矛盾する記述があったりするので，それらを弟子達が，削除したり，補ったりしているので，その作業自体にヘーゲルがかかわっていないことが問題なのです．

Q.2　ヘーゲルといえば，弁証法というイメージが強いが，それもやはり本人が言ったことではないのでしょうか．
A.2　従来の教科書的説明では，ヘーゲルは，対立・矛盾を運動・発展の推進力としてとらえ，弁証法を思考と存在をつらぬく一般的な運動・発展の論理としてとらえたことになっている．そして，「正・反・合」とか「定立（即自 an sich）・反定立（fuer sich）・総合（an und fuer sich）」という三段階の展開過程として理解されているけれども，ヘーゲル自身は，このような図式を取り出してその構造を論じるようなことはほとんどしていない．

Q.3　なぜ，まともな文章も書かない寡作な哲学者が，偉大な哲学者とされてきたのか，文章を書かなかったことに，何か深い意図があるという可能性は，ないのでしょうか．
A.3　わざと意図して書かなかったのか，書くことが苦手だったのかわかりませんが，結果として，書かずに，口答で弟子達に伝え，影響力をもった，ということでしょう．ソクラテスも書かずに，影響は2000年以上続いていますし，哲学ではありませんが，言語学のソシュールは，著書はなく，没後，講義録を弟子達が編纂して，『言語学言論』（講義録）を出版して，影響力をもちました．

Q.4　『ヘーゲル哲学への新視角』では，ほとんどがヘーゲルへの批判だったが，（逆に）評価される部分の話も聞いてみたいと思った．
A.4　最後に，加藤氏が言っているように，「時代の転換点をよくつかんだイマジネーション，新しい素材に対する敏感さ，非常に強い世俗性と宗教問題に対する故意の曖昧さ」がヘーゲルのよさということになるけでども，これが哲学なのか，哲学としてどういう意味があるのかは別途考えなければならないでしょう．

Q.0　自分の頭の中で問答するという話が何度も出てきましたが，頭の中で考える，ということがすごく不思議に思えます．．．
A.0　自分の思考をどう捉えるかは，それぞれの自由ですが，プラトンもアリストテレスも，自己との対話という発想を共通してもっていたことには，何か意味があるように思われます．

Q.1　問答法は何も前提としませんが，アリストテレスがnousが見抜くと言っていますが，それはやはり現実的にはどこかであきらめるべきものですか．
A.1　アリストテレスの場合，あきらめる，というより，帰納（エパゴーゲー）によって，nousが洞観する（見抜く）ことができるはずだ，という確信があったように思われます（『分析論後書』末尾）．

Q.2　論証で最初に前提となっているものは，同一律や矛盾律だと思いますが，それを問答法でより深く問う，あるいは否定するなどということが可能なのでしょうか．そもそも言語自体がそれを前提にしてしか成り立たない気がします．
A.2　直観主義（Brouwerなど）の立場では，最初から矛盾律を前提しないで議論を展開します（しかし，矛盾律を否定するのではない）が，この問題がはっきりしてくるのは，19世紀末から20世紀にかけてのことで，それ以前では，同一律や矛盾律は（そして排中律も），論理的な議論をする上での当然の前提とされています（今でも，普通に整合的な議論をする上では当然のことです）．アリストテレスの場合も，「XはAであって，Aでない」という主張をする者に対して，それを論駁する，という仕方で，矛盾律を養護する議論を展開しています（『形而上学』Γ巻）．また，矛盾律は，通常の議論においては，表面的に言明されることはなくても，前提されているので，矛盾律自体を問題とする場合にしか，矛盾律が議論の上で，表現されることはない，ということを言っています（『分析論後書』）．

Q.3　論証によって事物の本質を得ようとしても，前提の前提の前提．．．と永遠に考え続けることは机上の空論に過ぎず，実際にはなしえないことなので，問答を用いた方が本質に近付くことができるということでしょうか．
Q.4　論証と問答法は先に論証を行って，行き当たると，問答法を用いるということでよいのでしょうか？逆に問答法を先に用いることによって論証するのでしょうか？
A.3＆4　論証には論証に適した対象があり，問答法には問答法に適した対象があって，どちらか一方だけを用いるということではなくて，両方とも用いるということになります．また，どちらが先かということに関しても，原理的には，論証が用いる前提命題のうち，論証自体が論証できない究極的な前提に関しては，問答法で扱わざるをえませんが，だからといって，問答法を用いるのが先かというと，当初，明らかだと見なしていた前提を用いて論証を行なったが，本当に，用いた前提は自明だったのかが疑われるようになると，問答法で，その前提自体を吟味するということもあるでしょう．アリストテレスの学問分類に従うと，厳密な論証が可能な学（学問）は，取り扱う対象領域が限定されていて，その範囲内では，自明（明らかに真である）とされる前提があり（これらの前提を認めないとその学問が成り立たなくなる），それらの前提を用いて厳密な論証が可能であるけれども，逆にその範囲内でしか学は成り立たないということです．その範囲の限定を受けないで考察するのは，本来の哲学の任務であり，それを行なう方法のひとつが問答法です．

Q.0　モリヌクスの問題は興味深いと思います.
A.0　William Molyneux(1656-98)は，17世紀の経験論のロックだけでなく，生得観念を認める立場（大陸合理論）のライプニッツとの関係でも，さらにその後のバークリーとの関係でもおもしろいと思いますので，興味をもった諸君は，調べてみて下さい.

Q.1　中世に対しては，キリスト教にこり固まった世界という印象が強いです．別の考え方を許容できていないという所があった，と思っています.
A.1　西洋中世は，哲学に限らず，キリスト教を無視できないことは確かですが，キリスト教との関係で言えば，近世，現代も同様です．デカルトにとって神の問題が重要であったことは周知の通りですが，ヘーゲルも，シェリングも，ハイデッガーも，まず，大学の神学部に入っていますし，哲学にかわってからも，神の問題に言及し続けています．中世に戻ると，「西洋中世」とは言わずに，「中世」という言い方をするのは，哲学史的に言って，哲学・思想の地域的広がりが，「西洋」に限定して考えることができない，という側面があるからです．それは，イスラーム（イスラム教を中心とする文化）とその周辺の影響が無視できないからです．西洋中世は，自分達の先祖であるはずの西洋古代（特にギリシア）の哲学を部分的にしか受け継いでおらず，重要な部分を受け継いだアラビア語圏から，西洋古代の哲学の存在を知って，あらためて，西洋古代の哲学に注目する，という状況が10世紀～13世紀に起こりました．ですから，イスラーム文化圏も視野に入れることができるように，「西洋」という限定をはずして，「中世」という言い方をする場合が，特に，哲学の場合，少なくありません．その中世は，1000年以上にわたる長い期間を指しますから，その中でさまざまな哲学的思索が展開されましたが，キリスト教徒でない者もいましたし，キリスト教徒の中にも，さまざまな考え方の人たちがいて，現在の言い方をすれば，自然科学の研究も，数学的，論理学的研究も進みました．特に，論理学の研究水準につい言えば，中世末期とされる14世紀のsuppositio論を含む論理学は，例えば，17世紀の有名な（アルノーとニコールによる）『ポール・ロワイヤルの論理学』，さらに18世紀のカントの時代の論理学の水準を上回る高度なものでした．どうしてそういうことになったかというと，中世末期から近世初頭にかけて，いわゆる宗教改革の嵐が吹き荒れた際に，カトリックの教義を否定するだけでなく，カトリックの教義といっしょに，それまでに到達し獲得していた論理学や自然科学的な知識も捨ててしまい，また，振り出しにもどったからです．このことがはっきりしてきたのは，中世の論理学についての研究がある程度進んだ20世紀になってからです．間接的には，20世紀初頭に，ポーランドから少なくない優秀な論理学者（ウカシェヴィッチやタルスキなど）が出たことによって示されています．というのは，ポーランドは，中世以来，プロテスタント化されず，カトリックのままでした．そのため，中世以来の論理学の高い水準が維持されていたので，人口比からすると，人口全体は小さいのに，多くの優れた論理学者が育つ学問的環境があったと考えられています.

Q.2　先生が学生だった時，１つの授業は90分でしたか？そうだったら，ハードな時間割りですね.
A.2　一般教養は90分でしたが，学部は100分だったと記憶しています.

Q.0　現代においても，過去に作られた哲学の体系がすっかり失われているということもあるのでしょうか.
A.0　中世にとっての古代（ギリシア）哲学と同じような仕方ではありませんが，流行・はやりすたり，によって，ほとんど顧みられなくなった哲学体系というものはあります．例えば，19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリスのヘーゲル学派のF.H. BradleyやB. Bosanquetなどがそうですし，その影響を受けて独自の宇宙論を展開した，S.Alexanderの哲学は，今は，ほとんど誰も顧みません.

Q.1　昔の哲学者は未来について考える人とかはいたのでしょうか？
A.1　予言や占いのようなことについてあれこれ述べている人はいるでしょうが，思想史上，影響があった人物として，ヨアキム・ダ・フィオレがいますから，少し，詳しく紹介しましょう．これは，特に，哲学史に限らず，そもそも，歴史学でいう西洋の時代区分にも影響を及ぼしていますから，西洋史の研究者によっても研究されています．（資料参照）

Q.2　アラビアの人は「A」ではじまる名前ばかりなんですね.
A.2　これも書くなら，"A"と書いて下さい．「日本語」，"alphabet"という引用符の原則です．"Al-" というのは，アラビア語の冠詞ですから，名前自体は，KindiやFabarabiですし，Avicennaは，Ibn Sinaというアラビア語を耳で聞いたヨーロッパ人がラテン語化して書き表わした名称なので，もとのIbnは，息子という意味です．Averroesももとは，Ibn Rushdですから，ラテン語化すると，Aで始まっていますが，アラビア語としては，Aで始まっているわけではありません.

Q.3　やりがいのある分野だと思いますと言われていましたが，哲学を学んできて何か良かったと思うことはありますか？哲学は，答えのない学問だと思うので，行き詰まって苦労しそうです.
A.3　やりがいがある分野だと言ったのは，中世哲学の研究のことで，その「やりがい」というのは，古代哲学や近世哲学よりも，未だに現代語訳のない文献がたくさんあり，それらを研究することによって，「中世はキリスト教に支配されていて暗黒の時代だ」というような世間一般の（諸君の中にもそう思っている人がいるかもしれませんが）考えをあらためてもらう可能性があるということです．哲学史の研究については，自分は古代を中心にやってきていて，中世は古代との関係で，いわば，片手間に少しやっていますが，中世の研究は大変だけれども，先に述べたような意味で面白いと思うようになりました．哲学の研究そのものについては，やっていてよかったとかいうことは思ってみたこともなくて，気がついたらやっていた，というのが実情です．ただ，大学で，専門を決めるに当たり，入学する時には，すでに哲学をやろうと決めてはいましたが，第二希望，第三希望とかを事務に提出しなければならなかったので，哲学以外の候補として，印度哲学と西洋史（古代史）を考えていました．大学へ入る前，つまり，高校生の頃に，自分が考えていたことは，1月11日に紹介した『人文学へのいざない』(2006年初版)の「哲学と出会えるまで」に書いたように，自分が何かを考えていることをわかるとはどういうことか，という疑問をもっていたことと，森有正先生に出会ったことが大きいと思います．哲学以外の他の学問とは同じ意味では答の出ない問題を考え続けることが，自分にとっては当たり前になって，むしろ，その状態を楽しんでいるような感じです.

Q.0　アウグスティヌスの考えは理解できましたが，ヨアキムの考えは少しわかりにくかったです．彼は結局最後の審判をどういういうものと捉えていたのでしょうか？
A.0　ヨアキム自身は，1260年が世の終末と考えていたことは確かですが，具体的に何か最後の審判という出来事があったわけではなく，ヨアキムも何かイヴェントのようなことがあると考えていたのかどうかわかりません．ヨアキムの重要性は，むしろ，ヨアキムの説を信じて（解釈して）従った人たち（ヨアキスト，ヨアキム主義者）が，1260年以降を第三の時代（新しい時代）と捉えたこと，ということは同時に，1260年以前を中間の時代と見なしたこと，このことが，ルネッサンス（新生）や近世への肯定的評価に繋がったことです．

Q.1　ヨアキムとアウグスティヌスの違いは，アウグスティヌスは現代の終わりで世界は終わり，未来は無いと考え，ヨアキムは世界が終わっても人々に未来は有ると考えたという点なのでしょうか．
A.1　アウグスティヌスの場合も，（最後の審判で）現世が終わっても，聖書にあるように，永遠の命に与る者と，滅びに至る者に分かれ，永遠の命に与る者には，永遠の時がある，ということになるでしょう．

Q.2a　哲学と倫理学の違いについて例えばどのような点が挙げられますか？
Q.2b　倫理に興味があったのに，なぜ哲学に進んだのか，という話がありましたが，そもそも倫理と哲学の違いは何でしょうか？
A.2　哲学と倫理学をどうのように規定するか，という問題ですから，この問題は，哲学者によって異なる，と言わざるを得ませんが，伝統的な見方（アリストテレスの学問分類）とそれに対して意義を唱えた例として，以前，名前をあげたレヴィナスの考え方を挙げることができます．

Q.0　レヴィナスについての本は何冊か読んだことがありますが，さっぱりでした．「顔」は何かの例えだと思っていましたが，以外（ママ，意外？）にそのままなのでしょうか．
A.0　visage（まなざし，顔）は，意外に（そうでもない）そのままでしょう．また，そのままのほうが，説得力があると思います（説得されるかどうかは別ですが）．

Q.1　ハイデッガーの「世界内存在」という考え方が『茶の本』や荘子の考えからきているという話はびっくりしました．ハイデッガーと荘子を同時に研究している人はなかなかいないと思うけど，このような事実がある以上，「西洋哲学」として西洋だけ扱うのではなく，もっと広い目で見る必要があるのかとも思いました．
A.1　すぐに成果が明らかになるようなものではありませんが，私も，インド哲学の人たちと一緒に演習に参加したり，哲学の院生たちとは，『論語』を少しずつ読んだりしています．いわゆる東洋のものへの関心は，最近，年をとったからではなくて，若い頃からずっとあるのですが，専門的な研究ということになると，それぞれの専門分野での研究上のルールや，サンスクリットや中国語，漢文の読解力が必要なので，まだ，その域に達していません．若いみなさんは，まだ，これから可能性があるのですから，自分の能力に自分で限界を決めてしまわず，西洋の哲学を専門に選んでも，同時に，サンスクリットや漢文を学んで，インドや中国やその他の文献に親しんでもらいたいと思います．そのことが同時に，西洋の哲学の理解にもプラスになると思います．

Q.2　今までの授業15回でいちばん面白かったです．僕は倫理学の可能性を信じていますし，これから専攻をとるときに今日の哲学と倫理の違いについてのことを参考に色々考えたいと思います．哲学で有名な人物たちも，やはり「パクリ」と言われるような似た記述があるんですね．
A.2　似た記述と言っても，本当に「パクリ」つまり，Plagiat（プラギアート，剽窃）では，してはならないことですから，我々は，出典を明記して引用するという形をとらなければなりません．ハイデッガーの場合は，微妙ですが，時間的前御関係からして，『有と時』を公表する前に，『茶の本』のドイツ語訳を読んでいますから，もし，『茶の本』を読んでいなかったとしたら，『有と時』の中に，In-der-Welt-seinが出てきたかどうか．．．

Q.3　「美しい」と感じる価値判断について，その時代その時代によって多数の人が美しいと感じる，いわゆる"好み"が違うという話があったが，その時代がどのような時代だったのかという時代背景が関係しているのではないかと私は思った．（以下略）
A.3　以下略させてもらった具体的な事例の説明は，唯物的な，というか，経験的な，社会学的な説明として理解できます．これに対して，授業で紹介した，カントの第三批判（『判断力批判』）の前半の課題は，美の判定の規則や標識（バウムガルテンの美学=趣味判断の批判，Aesthetik）は経験的であって，ア・プリオリな法則ではない，という立場（『純粋理性批判』A版のころのカント自身の立場）に対して，「快不快の感情」に関してア・プリオリな原理がいかにして可能かを明らかにすることでした．カントの用語が入って少しわかりにくくなったかもしれませんので，質問にあわせて言い換えると，「美しい」と感じる価値判断を，経験的に説明するのではなくて，経験に依存しないで（ア・プリオリに），説明することを課題としているということです．もっとも，これには，カントのいう自然の合目的性という，もうひとつの側面を理解が必要になるのですが．．．